

九州産業考古学会報

第4号 2005年3月31日発行 発行元：九州産業考古学会

産業考古学への道

清水憲一（九州国際大学）



産業考古学、またその「発祥の地」である Ironbridge に私が初めて接したのは、ちょうど 20 年前、1984 年のことです。二昔前のこととなります。

縁あって八幡大学（現九州国際大学）に赴任し、経済史総論と日本経済史の講義を担当して6年目のことで、35歳の私は勇んで英国バーミンガム大学に留学しました。大学では、専門のイギリス経済史研究者でない私に対して、学科長 J.R.Harris 教授が、社会経済史学科と Ironbridge が共同運営していた「産業考古学」コースに参加できるように手配してくれました。建築構造のマニアックな授業などは、適当に顔を出すだけの私の理解力を遙かに超えていました。無知ほど恐いものはない、と今にして思います。

それでも「Ironbridge を訪ね、想像の炎を燃やそう」（拙訳）というパンフレットは私を惹きつけました。バーミンガムから 50 キロメートルほど離れた Ironbridge に何度か車を飛ばして関連資料を集めました。そうしているうちに、「国民の歴史意識に貢献すべき産業・技術史の Museum とは具体的にどのようなものか、またそれは、どのように作りあげられたのか」、を日本に紹介しようと思い立ったのです。こうして論文「産業遺跡の保存と産業・企業史—— The Ironbridge Gorge Museum と産業革命期のコールブルクデイル製鉄所——（1・2・3）」（八幡大学論集、1984年）をまとめました。

帰国後は、『北九州市史（近代産業経済篇）』の仕事が待っていました。さらに続いて『北九州市産業史』（いずれも北九州市発行）と、北九州経済史研究が私の専門となりました。市内にはこの分野の研究者がまだまだ少数であることから、私は北九州市の近代化遺産シンポジウムにも関わることになり、今では北九州市のものづくりの歴史的伝統を「北九州産業技術博物館」（来年開館予定）に継承しようという試みにも参加しています。

私のこの 20 年間の研究成果には忸怩たるものがありますが、幸いにして当大学には『製鐵所文書』がまとめて設置されています。これによって官営八幡製鐵所の創業過程を見直すのが私の今の研究課題です。遅まきながら昨年 3 月に入会し、改めて産業考古学に向けて「炎を燃や」している次第です。

【研究発表】

旧岡田医院の歴史と特徴

市原猛志

(九州大学研究生・NPO法人北九州COSMOSクラブ会員)

岡田医院は北九州市の中心部、小倉北区・室町（リバーウォーク北九州向かい）に古くからある内科医院であった。院長が昨年逝去されたため、空家となり解体される危険性が生じた。その歴史的価値を調査するため、相続人である眞勢様より NPO 法人北九州 COSMOS クラブにその調査が依頼された。本稿はその中で判明した新事実を報告するものである。

建物調査期間は平成16年（2004）8月～翌年1月に於いて随時実施した。当調査では調査報告作成、及び CAD 図面作成を行っており、本稿ではそのうち建物由来に重点を置き、解説を行う。

なお本調査については、NPO 法人北九州 COSMOS クラブ会員がこれに携わった。

1-1 建物構造

当該建築物の構造材は木である。実測調査当時トタンで屋根を覆っており、その内側に瓦を有していた。窓の殆どは上下窓であり、これは建物内部に於いても同様である。外壁は板によって覆われている。玄関入口部分に石造の柄石があり、年代はかなり古いものと断定できる。建物1階部分北西面および北東面に増築と思われる部分（洗面場、廊下）が存在する。また東側には増築された別棟が併置されている。窓配置は旧電車通りに面している部分に窓を多く配置し、南東面はほぼ窓を配置していない。北西面には2階部分に使用不能の扉、それを挟むように窓が配置されている。

天井は和小屋組によって作られていた。ほぼ中心部分に階段が残存しており、かつて2階より上部にあがる用途があった時の遺構である。一部墨書きと思われる文様が残っているがこれについては解説判明されていない。また天井部分からは棟札が、文



写真1 旧岡田医院

字が伏せられた状態で発見された。

1-2 棟札について

棟札は尖頭型のもので、長さ1725mm、長幅275mm、狭幅250mmであった。明治23年に改築された旨の記述と工事関係者の一覧が記載されていた。棟札が竣工時のものかどうかについては、改築ごとに棟札は付け替えられることがままあり、それは北九州市内の建物例にも見られることから、この棟札は改築時のものと言うこと（そもそも「改築」と記載される例は稀である）が妥当であろう。

1-3 建物内装

建物内装についてであるが、1・2階共に多くの部屋で後年改装された部分が存在した。天井や内壁の改装が行われ、また階段欄干の一部に切除が見られた。建造時のものと考えられる内装部分では、天井縁部

の通気口、漆喰による装飾、階段欄干、及び階段室に建築物としての特色が凝縮されている。

次に歴史調査の中で発見された写真を解説する。これら史料から建物変遷の過程を特定する。

2-1 旧小倉警察署写真

棟札の記述によって、旧岡田医院は明治23年から昭和にかけて小倉警察署であったことが明らかになった。現在との外観上の差異は、「火ノ見台」の存在だけでなく、窓の小庇や軒蛇腹、また外壁が漆喰塗と想定できることなど多岐に及び、建造当初の外観は明治中期の官公庁建築の特徴を顕現していた建物であることが判明した。なおこの写真から現在と建物の向きが異なることが見て取れる。

2-2 奥野医院写真

写真から現在の姿と比較するならば、外装材は警察署時代とは異なり、下見板が張られている。火ノ見台がまだあること、また玄関部分にバルコニーが設置され、外扉には鉄柵が用いられていたと推定されることなどを除けば、現在の外装とほぼ変わらない外観になっており、この時の改装が、現在まで遺る建物のイメージを決定づけているとも言える。

旧小倉警察署写真に見られたそれまでの

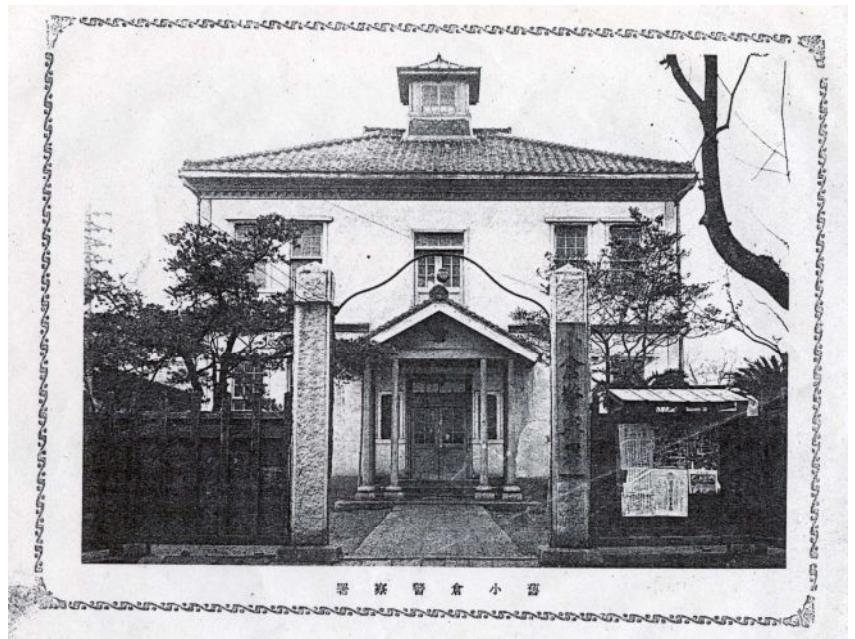


写真2 旧小倉警察署庁舎（明治期？撮影）



写真3 奥野医院（昭和3年当時・複写）

漆喰塗の外装よりも、現在旧岡田医院を知るものにとって、下見板張の外装が「懐かしい建物の姿」となっていることは、建物歴史調査の過程で多くの方から証言を得ているところである。

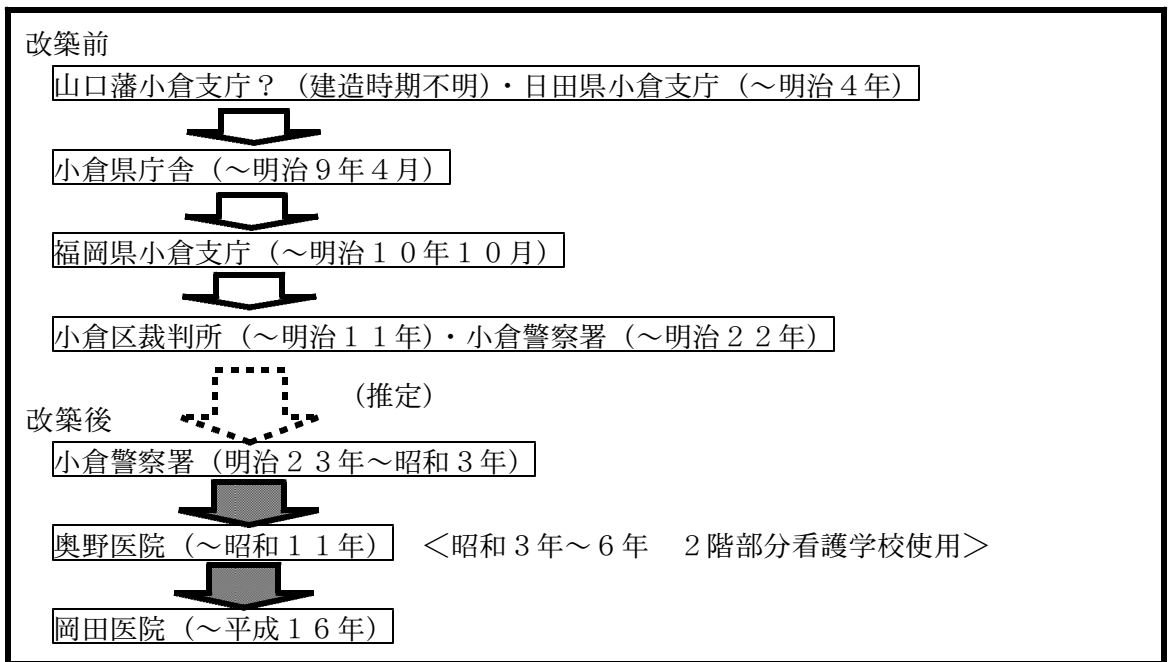


表 建物の変遷、その年代と名称

3 結論

現在ある旧岡田医院の構造の大枠は、明治23年改築の小倉警察署である。

部材の時期からそれより古い年代の竣工（明治元年・旧日田県小倉支庁竣工期）という可能性は否定できないが、本稿の中で断定するまでには至らなかった。改築前の建物と改築後のそれとを結びつける証拠は、県庁時代の建物写真、および図面の発見を待つ他ないものと思われる。

昭和3年に医院として払い下げられた際、改装及び曳家され、現在地に移設された。

絵はがきの常盤橋周辺写真から類推すると、昭和10年代には現在の形に近似した構造になっていたという推論をたてる事が出来る。曳家された段階で正面玄関は変更され、また昭和40年代にトタン葺きの現状になったと推定される。

以上のことより、当該建築物は遅くとも明治23年に竣工されたもので、関門北九州地域内でもっとも古い擬洋風建築（西洋建築の教育を受けていない者が設計施工し

た建築物で、構造的には和洋折衷の特徴を併せ持つもの）であることが判明した。

この種の建築は全国的に見ても数が少なく、福岡県内においては当該建築が現在確認できる唯一のものである。この建物の建築的価値は主にこの建設年代と構造的特徴に集約されていると言える。

なお、この調査にご協力いただいた小倉北警察署、北九州市文書館、国立公文書館、奥野保正氏、建物所有者であった眞勢様、そしてNPO 法人北九州 COSMOS クラブ会員の皆様に心より感謝申し上げます。

【失われた産業遺産】

雁ノ巣飛行場跡の格納庫群

砂場一明（会員）

J R 香椎線（旧博多湾鉄道）が走る、海の中道海浜公園・雁の巣レクリエーションセンター一帯は、かつて東洋一を誇った福岡第一飛行場の跡地である。この地が雁の巣と言われることから雁ノ巣飛行場とも呼ばれ、一般にはこの名の方が知られているようだ。面積は約 60 万㎡（拡張後 135 万㎡）で、滑走路 30 m× 600 m 1 本（3 年後 800 m 級 2 本増設・一部現存）と、水陸兼用のため飛行艇用斜路（現存）を備えた国内初の国際空港として、昭和 11 年（1936 年）6 月に開港している。



国策会社の大日本航空により、朝鮮・中国・台湾・フィリピンさらに東南アジア各国への国際線をもつ“ハブ空港”となったが、栄光の期間は短く、大戦中は陸軍に、敗戦後は米軍に接収され、昭和 47 年の返還まで軍用飛行場に成り果てた。その間に空の玄関口は博多区板付の福岡空港へと移り、当所は悲運のまゝ廃止されるに至っている。

今回の「失われた産業遺産」とは、当時の逓信省が開港時に建設した 3 棟の鉄骨造り格納庫をいう。この内 2 棟は特に大きく、間口 30 m・奥行き 50 m・高さ 12 m 超・広さ 1000 ~ 1600 ㎡の堂々たる建造物で、近代日本の航空史を考える上でも貴重な遺産であった。福岡市教育委員会により平成 13 年（2001 年）11 月、文化財的価値を探る調査がなされたが、保存の決定にまで行かず翌 14 年 9 月に解体・撤去された。

これほど性急に撤去されたのは、周辺荒廃による一部住民からの要望もあったが、それよりも福岡市が進める人工島取付け道路を格納庫群の真裏に計画したため、車の

写真 在りし日の大型格納庫（平成12年撮影）

通行に危険を及ぼすという理由からであった。十数年来熱心に格納庫の保存を訴え続けてきた市民グループは、「日本の国際空港発祥の地に、せめて証の記念碑を…」と切望している。いつの時も歴史遺産の保存については、管理する側の立場と、要望側との価値観の相違が問題となるが、今回もその典型のように思える。

敷地の外れ、正門があったと思われる近くに小さな碑が残されている。《海の中道 由緒も深き 雁の巣松》と刻まれた高さ 1 m 余りの自然石で、裏面に飛行場建設の経緯が彫り込まれている。《白砂青松ノ丘 博多湾二面シタル雁ノ古里ヲ選ビ 水陸兼用ノ国際飛行場ヲ建設ス、昭和十年一月起工シ 翌十一年五月竣工ス 場内面積十八萬餘坪 昭和十一年六月 福岡飛行場建設事務所》とある。因みに、昭和 5 年 3 月に開港していた名島の水上飛行場は福岡第二飛行場と改名され、9 年まで使用された。また今の福岡空港は昭和 19 年から陸軍の飛行場として建設が始められたものである。

【報告】

「堀川サミット2004」について

青地学（ポリテクセンター八幡）

2004年10月17日(日)、北九州市八幡西区の九州女子大学耕学館において「堀川サミット2004 ―堀川の歴史と貢献を学び、これからの100年を考える―」が開催された。これは「堀川再生を考える実行委員会」が主催したもので、堀川開削200周年記念事業の一環として、「堀川いっせい清掃」、「堀川スカベンジャー」に続いて開催された。

午前には川の再生への取組みにおける平戸市、柳川市など各地の事例発表があり、午後は分科会として、文化・歴史部会（シンポジウム）、こども堀川大臣サミット（ワークショップ）、地域部会（同）が開催された後、全体会で今後への提案が発表された。

図1は堀川が果たした役割について紹介したパネルで、本会の市原猛志会員が作成したものである。



図1 歴史展示

文化・歴史部会は 図2のように会場がほぼ満席の盛況で、地元での堀川の歴史への関心の高さがうかがえた。現在の堀川が曲川で分断されていることへの不満は大きく、ポンプアップに頼らない自然の流れを持った往年の堀川への回帰が強く求められた。



図2 文化・歴史部会

下の図3はこども堀川大臣サミットで、堀川流域の小学生により描かれた堀川の将来像である。排水路の様相を呈している現状を離れた自由な発想で描かれ、魚が泳ぎ釣りを楽しむことができる光景となっている。このような故郷の川への夢が実現して欲しいものである。



図3 こども堀川大臣サミット成果物

最後の全体会では、堀川の歴史と貢献を再認識し、三面コンクリートの現状を改善し、水量豊かで蛍の棲む美しい川に再生させる努力を継続していくことが確認された。

【報告】

日産見学会一日産のルーツをたどる一

松田寛（事務局長）

2004年10月27日(水)、小会は西日本工業大学と共催で、日産自動車株式会社・九州工場の生産ラインと、日立金属株式会社・九州工場の鋳物記念館（いずれも福岡県京都郡苅田町）の見学会を行ないました。小会会員と西日本工業大学大学院生など、あわせて25名が参加しました。

両社はいずれも、その前身は鮎川義介（1880～1967年）が戦前に作り上げた日本産業＝日産コンツェルンの有力企業です。すなわち日立金属は日立製作所の鉄鋼部門が戦後分離独立した形ですが、そのルーツは戦前から北九州市戸畑区にあった戸畑鋳物株式会社で、これは1910年に鮎川が自動車産業への進出を見込んで設立したもので、いわば日産自動車の本家筋にあたります。

日産自動車の九州工場は、1975年に稼働を開始し、現在は従業員約4700名、車種はティアナ、ブルーバードシルフィなど十数種で、今や同社の主力工場であるのみならず、九州最大の輸出企業となっているということです。昨年12月には、累計生産台数が1000万台を達成し、本年は操業30周年ということで、記念事業も計画されています。

日立金属の鋳物記念館は、創業者の企業者活動を顕彰するとともに、日本の近代鋳鋼技術史に同社を歴史的に位置づけるべく設立されています。建物は旧戸畑工場にあった建屋を移築したもので、鉄骨平屋建て一部中二階、主要な鉄骨には、米国カーネギーの銘が見られました。主な展示品としては、鮎川が若くして渡米した当時の小型日記帳、愛用の机、愛読書など、鋳物技術史に関しては、会社設立契約書、創業当時の鋳造作業用機具、反射炉の模型、島津家より提供された日本最古の旋盤などです。

虫眼鏡が必要なほど細かい字でびっしり書き込まれた滞米中のメモ帳には圧倒させられました。産業立国、工業国産化を先途とした明治の先駆的技術者の志に、ものづくりの意味を改めて考えさせられました。このような貴重な資料の見学の便宜を図って頂いた両社と、企画および案内を担当された池森寛教授（西日本工業大学）にお礼申し上げます。



【報告】

長崎産業遺産見学会

後藤恵之輔（長崎大学）

2004年12月10日(金)、午後1時から5時まで、三菱重工業（株）長崎造船所の産業遺産見学会を実施した。参加者は当会から4名、長崎大学工学部環境計画研究室（後藤研究室）から12名であった。当会の希望によりタービン工場と史料館が見学先に用意された。

長崎造船所は、1857（安政4）年、わが国初の艦船修理工場「長崎製鉄所」として設立された。以来、わが国を代表する数多くの船舶を建造するとともに、各種発電プラントを手掛けるなど、造船・機械製造を両輪に活動を続けてきている。具体的には、大型タンカーや豪華客船、LNG船、LPG船などの船舶、火力・地熱・風力発電プラント、環境保全設備、海水淡水化プラントなどで、現在は本工場、香焼工場、幸町工場、諫早工場の4工場で開催されている。

タービン工場は本工場内にある。本工場には、かつて戦艦「武蔵」を建造した船台と30万トンドックがあり、現在でも多種多様な船の建造・修理が行なわれている。タービン工場は年間生産能力400万kwで、100万kwの大型事業用のほか、地熱発電用、船舶から各種産業用までの高性能蒸気ター

ピンを、高度に自動化された設備で製作している。また、最先端技術製品を手掛けるエレクトロニクス工場や燃料電池工場も有している。

史料館には、安政4年の創業から現在に至るまで、当工場で作成あるいは使用した各種大型機器を始め、昔日を彷彿させる写真など、貴重な資料が数多く展示してある。また建物自体も1898（明治31）年建築のレンガ造り2階建てで貴重である。

資料の中のいくつかを示すと、日本最初の工作機械（安政4年長崎熔鉄所建設の際に幕府がオランダから購入した堅削盤）、国産第1号陸用蒸気タービン（造船所が英国パーソンズ社との技術提携により1908年製作）、夕顔丸（1887年竣工した国産初の鋼鉄船、長崎～高島～端島（軍艦島）間の貨客船として76年間運航）の写真と操舵輪、「武蔵」ゆかりの品々などである。

上のように充実した見学となった。特に史料館では日本の近代化の過程を凝縮したのを見ることができ、産業考古学の観点から有意義であった。平日ということから今回参加できなかった当会会員の方々にも是非見学されるようお勧めしたい。末筆ながら、見学案内をして下さった長崎造船所総務部の河野一平、田中規隆両氏に深甚の謝意を表します。



写真 三菱重工業長崎造船所史料館

【報告】

学生のための技術史講演会

池森寛（西日本工業大学）

2004年12月23日（木）、西日本工業大学の小倉サテライトキャンパスで、学生のための技術史講演会《機械技術者の教養—技術史を学ぶ—》が行われた。この講演会は、日本機械学会（JSME）九州支部学生会が主催し、学生が自主運営する行事で、今回は当番校の西日本工業大学の機械システム工学科4年生の浦野啓太君と顧問の池森が世話役を担当した。九州産業考古学会の協賛も得て、同会からは会長以下8名が参加した。参加者は同学科学生54名を含む合計77名、大牟田市や福岡市からの参加もあった。

講演会は2部構成で、学生代表の浦野君の挨拶に始まり、前半は北九州市企画政策室主幹・吉森裕氏の講演で、「技術の知と心の継承に向けて」と題して、平成18年開設予定の「北九州産業技術博物館」の設立理念や活動展開案などが紹介された。また、現在北九州市で実施され、今後は同館で展開される予定のイノベーションフォーラムや北九州デザイン塾の説明も行われ、身近な話題だけに学生たちは真剣に耳を傾けていた。

後半は西日本工業大学坂本正史学長の熱気あふれる挨拶の後、東京から来て頂いた職業能力開発総合大学校の堤一郎先生から「鉄道遺産を通して技術史を学ぶ」と題して講演があった。鉄道の歴史を学ぶことによって、技術進歩の過程や社会的な背景・ニーズなどが学べることの具体的事例が、美しいスライドを交えて紹介され、身近な鉄道史を通じて先人達の仕事・生活・文化に触れることができた。日本の鉄道産業考古学の第一人者の分かりやすい講義に、うなずきながら熱心に聴く学生の姿が見受けられた。また、先生からは機械学会で制作された『機械記念物:鉄道シリーズ』の貴重

なカラー冊子も配布された。

技術史の学習は、単に過去の歴史を学ぶだけでなく、現在をより深く考え、未来を創造していく心を育ててくれる。このことを学生諸君とともに改めて勉強することができた。最後に、講演会に御協力下さった日本機械学会に感謝いたします。



【お知らせ】

日本産業技術史学会志免にて開催決定

日本産業技術史学会(後藤邦夫会長)は、技術史のみならず産業遺産も研究対象としている学会で、産業考古学と深い関連を持っています。このたび学会から、今年の大회는福岡県の志免町で行なう、との通知が寄せられました。竪坑櫓が存否の危機にある現在、「産業遺産としての志免炭鉱の役割を正しく認識し、広く周知させることを目指して」「志免炭鉱の技術的、歴史的役割を検討する特別講演とシンポジウム」が行なわれるとともに、一般講演(研究発表)でも「石炭や炭鉱に関する技術史」が主なテーマとされています。

志免の産業遺産は小会も長年取り組んできていますし、今大会では会員以外に「他学会の会員、志免炭鉱関係者、炭鉱・石炭に興味のある方々など」広く一般の参加者も募られていますので、以下に概要をお知らせします。

期日：第21回年会講演会

6月18日(土)参加費1000円

場所：志免町総合福祉施設シーメイト

一般講演：9:20～11:30(8件)

13:30～14:30(4件)

特別講演：11:40～12:30

浜島毅氏(元志免鉱業所副長)

シンポジウム：15:00～17:00

「石炭産業遺産の保存・活用——旧志免炭鉱竪坑櫓の保存・活用を考える——」学会員のほか地元関係者等

見学ツアー：6月19日(日)

8:30～18:20 参加費5000円

(主な見学先・九州大学石炭研究センター、宮田町石炭記念館、直方市石炭資料館、飯塚市麻生邸、嘉穂劇場、志免町産業遺産収蔵庫など)

オプションツアー：6月20日(月)

長崎県「三井松島リソース池島炭鉱」見学(坑内見学定員有)。

参加申込：各イベントは会員以外の参加も歓迎。締切6月8日。詳しくは志免大会事務局(担当は小会の松田寛会員。アドレスは当会報末尾)まで。



【お知らせ】

産業観光国際フォーラムin愛知・名古屋 TICCIH中間会議2005のお知らせ

産業考古学会・中部産業遺産研究会主催の国際大会についてアナウンスいたします。

愛知県及びその県庁所在都市名古屋は、日本の中央に位置し、古くからモノづくりが盛んな地域として栄えてきました。そして現在も愛知県を含む中部地域は、韓国に匹敵するGDPで国内産業をリードしていません。

江戸時代(1603～1867)からの伝統産業はもちろん、近代日本の工業化を担ってきた愛知県には、数多くの産業遺産があり、それらを保存・展示する資料館、博物館も多数設立されています。また、現

在稼働中の工場でも見学可能なところが数多くあります。

近年、愛知県・名古屋市では、こうした産業遺産や工場などを国内外の多くの方々に訪れていただき、モノづくりの心を広め、交流の促進を目的とした「産業観光」を鋭意推進しています。

2005年7月に開催される TICCIH 中間会議と併催の「産業観光国際フォーラム」は、産業遺産の保護、特にその利活用について、国内海外の専門家だけでなく広く一般の県民・市民にも参加を呼びかけ、ともに考え、体験する絶好の機会を提供したいということから企画されています。以下にその概要をお知らせいたします。

テーマ：「産業観光の新たな展開～産業観光と地域づくり～」

開催場所：名古屋国際会議場

各期日（イベント別参加も可能）：

2005年 7月5日（火）

「プレコンgresツアー」（浜松市立楽器博物館、JR 東海浜松新幹線工場を見学視察）

7月6日（水）

TICCIH 中間会議・産業観光国際フォーラム開会式

・基調講演1：S・スミス（TICCIH 事務局長、元アイアンブリッジ館長）

・パネルディスカッション「産業観光と地域づくり」コーディネーター：奥野信宏氏（産業観光国際フォーラム実行委員会委員長・中部大学教授）

・分科会・交流会（レセプション）

7月7日（木）

分科会・閉会式

・愛・地球博会場視察

7月8日（金）

「中部地域産業遺産見学研修バスツアー」（産業技術記念館、ノリタケ陶土精製工場

遺構、鍋屋上野浄水場→東山給水塔など）

・名古屋港クルーズ

7月9日（土）

「TICCIH コンgresツアー」（常滑の登窯、窯のある広場資料館、タイル博物館、依佐美送信所と2号鉄塔遺構（刈谷）など）

7月10日（日）

「ポスト・コンgresツアー」（琵琶湖疎水、インクライン、水路閣、疎水記念館、南禅寺など）

7月11日（月）

二条城見学、解散



写真・ノリタケ陶土精製工場遺構

参加登録費

会議参加費

TICCIH / 学会・研究会会員 16,000 円

同伴者（セッション参加不可） 12,000 円

学生会員（在学証明書か学生証コピー要） 10,000 円

各オプション料金

オプションナル・ツアー料金（TICCIH / 学会・研究会会員）

プレコンgresツアー（5日） 6,000 円

名古屋港クルーズ（8日） 8,000 円

コンgresツアー（9日～10日） 28,000 円

ポストコンgresツアー（10日～11日）

35,000 円(新幹線料金含む)

お問い合わせ

産業観光国際フォーラム事務局：フォーラム関係対応

〒 460-8422 愛知県名古屋市中区栄2丁目10番19号 名古屋商工会議所 気付
hkanazawa@nagoya-cci.or.jp

中部産業遺産研究会 事務局：ツアー対応
〒 440-0093 愛知県豊橋市横須賀町元屋敷14-2 石田正治 気付
ishida96@tcp-ip.or.jp



【お知らせ】

年次総会（佐賀）のお知らせ

期日：2005年5月28日（土）

時間：見学会 10:00～12:00

見学会・総会 13:00～18:00

見学会：JR 佐賀駅（大改札口）9:30 集合
（旧佐賀銀行呉服町支店、古賀銀行等見学）

総会会場：佐賀大学経済学部会議室

*車でお越しの方は、駅前駐車場もしくは
佐賀大学駐車場をご利用ください。

基調講演：「佐賀県近代化遺産について」
山本長次氏（佐賀大学）

研究発表会参加募集

テーマ：産業考古学に関する事柄

発表時間：一人15分（質疑応答含む）

募集人数：（予定）4名

発表申込締切日は5月20日です。

発表申込（機材使用予約）、及びお問い合わせは事務局（巻末連絡先）まで。

【追悼】

桑原三郎先生を偲ぶ

木元富夫（会長）

九州産業考古学会の設立者で初代会長を務められた桑原三郎先生は、去る1月、78歳で亡くなられた。先生は鹿児島県有明町の御出身で、1966年（昭和41年）に近畿大学九州工学部建築学科に赴任された。昨年発表された「筑豊の劇場と炭坑の会館」は、奇しくも先生の研究歴を物語るものとなっている（『西日本文化』400号、筑豊炭田特集号、西日本文化協会、2004年）。すなわち先生は福岡県の「飯塚に赴任し、しばらくして嘉穂劇場の存在を知った。何かにジット耐えて立っている印象が強く残り、筑豊炭田の歴史も秘められているのではとの思いもあり……」こうして筑豊各地の芝居小屋めぐりが始まったわけである。特に嘉穂劇場についてはその地域文化的意義を力説され、建築学的調査を行なうなど維持保存に向けての支援活動に尽くされた。

2003年夏の記録的集中豪雨による同劇場の壊滅的被害の始末は、会報前号にある深町純亮「再建成った嘉穂劇場」に詳しいが、その修築竣工披露も兼ねて04年12月に、ドキュメンタリー映画「ヤマに生きる」（萩原吉弘監督）上映会が行なわれた。劇場には先生も来られていて、久闊を叙したのが図らずも先生と話した最後になった。

鹿児島人らしく先生は焼酎がお好きであった。私が産業考古学会に入会してまもなく、飯塚で全国大会が開かれた頃、飯塚であったか八幡であったか、同じ鹿児島出身で話の合う前田清志先生との酒席に相伴させてもらう機会があったが、先生は飲みかつ談じてやむことがなかった。先生の御冥福を祈るとともに、不肖ながら初心に帰り、筑豊の産業遺産にかけた先生の遺志を継いで行かねばならないと念じている次第である。

〈会報第4号・目次〉

<p>【巻頭言】 産業考古学への道……………清水憲一 1</p> <p>【研究発表】 旧岡田医院建物調査……………市原猛志 2</p> <p>【失われた産業遺産】 雁ノ巣飛行場跡の格納庫群 ……………砂場一明 5</p> <p>【報告】 日産見学会一日産のルーツをたどるー ……………松田寛 6</p> <p>長崎産業遺産見学会 ……………後藤惠之輔 6</p>	<p style="text-align: center;">学生のための技術史講演会</p> <p>……………池森寛 7</p> <p>【お知らせ】 日本産業技術史学会総会志免にて開催 …………… 8</p> <p>TICCIH 中間大会並びに国際産業観光フォー ラム in 名古屋のご案内 …………… 9</p> <p>総会予告 …………… 10</p> <p>【追悼】 桑原三郎先生を偲ぶ……………木元富夫 11</p> <p>今後の予定 …………… 12</p>
---	---

(お知らせ内の各イベントは、頁末の当会ウェブサイトからもご確認ください)

今後の予定

当会の今後の予定は以下のようになっています。

月・日	活動内容
4月	
5月28日	年次総会（佐賀県佐賀市）
6月18日 19日	日本産業技術史学会総会 （福岡県志免町）
7月6日 7日 8日	産業観光国際フォーラム in 愛知 ・名古屋 TICCIH 中間会議 2005
8月	
9月	会報第5号発行

ご寄付のお願い

九州産業考古学会は、活動補助のために寄付を受け入れています。当会の趣旨をご理解いただき、ご寄付を頂ければ幸いです。

寄付受付口座

福岡銀行大牟田支店（店番691）
普通 1914369
九州産業考古学会

〈編集後記〉 編集という立場は裏役に徹すべき、と思っている。しかしながら、今回研究発表として拙稿を載せてしまった。調査に協力していただいた方々に敬意を表しての掲載であったが、それでも気が引けることは否めない。今年は日本産業技術史学会に産業観光国際フォーラムなど、イベントが目白押しである。この会報が皆様のご活躍の一助となれば幸いです。（市原）

九州産業考古学会事務局

〒 809-0041 福岡県中間市岩瀬西町 63-17 松田寛 気付

TEL&FAX : 093-245-2995 E-mail : matupi2002@s2.dion.ne.jp

URL : <http://cgi.f17.livedoor.ne.jp/~heritage/>